

# 旧下関市における「地域伝承碑」のGISデータベース作成とその活用

## Construction and utilization of the GIS database of monuments in the former Shimonoseki City

佐藤裕哉

### I. はじめに

地域の歴史を学ぶためには遺構などの実物が重要である。しかしながら、遺構などの建造物は古くなるほど耐震など物理的な保存の問題が生じたり、都市開発などの影響を受けたりする。例えば、広島市の被爆建物の保存では「機能を優先する社会の要請や老朽化、経費、美観の問題によって被爆建物の建築寿命は、短縮されたり、延伸されたりもした」(李ほか、2004: 113)と指摘されている。

建造物を残すには莫大なコストが必要とされ、それらを保存するには社会的な意義が求められる。このため、建造物の保存は、地域を代表する歴史を示すものに限定される。一方、顕彰碑などの地域伝承碑<sup>1)</sup>は、建造物に比べると小さく場所をとらず、移設も行いやすいため残存しやすいと考える。また、後述の通り集落の発展に貢献した人物の顕彰碑など小学校区よりも狭い範囲の地域の歴史の記述もあり、身近な地域について学ぶための教材となり得ると考える。そのため、地域伝承碑のデータベース化、アーカイブ化には意義がある。

矢野(2021)は、京都市の宿泊施設のGISデータベースを作成し、時空間的な立地展開の分析を通して、GISデータベースを活用した地理学的研究の可能性について考察した。データベースの分析により、宿泊施設増減の地域パターンや町屋の利活用との関係などを見出した。そして、災害時の避難行動を想定するうえで重要な情報となるなど、データベース作成の意義を指摘する。

身近な地域を学ぶための教材という点について植村(2018)は、室戸台風の京都市周辺の学校被害を取り上げ、その記念碑の建立と、教育現場での活用について考察し、石碑の現代的意義について、「学区民らが建立した記念碑が校庭などに設置されている学校では今日でも風災記念や防災行事が実施されており、碑の教育的価値は高い」(p.22)としている。今井ほか(2017)は、東広島市旧西条町の202基の石碑を調査、分類し、その教材的意義を検討した。そして、「各地域に建立されている石碑を活用することで、社会科における『地域学習』不振の要因のひとつである、地域に即した資料の不足の改善の一助となる」(p.14)とする。また、藤本ほか(2016)は、広島県の水害碑を調査、分析し、結論として水害碑の情報

は「断片的に取り上げられている状況である。将来的には、水害碑に関する石碑の情報を統一的に整理し、それらの情報がインターネット上で検索でき、自由に利用できることが望ましい。それにより、地域社会や学校現場などの防災教育あるいは郷土教育の資料として活用されることにつながる」(p.97)と指摘する。

そこで本稿では、旧下関市<sup>2)</sup>を対象に、地域伝承碑のアーカイブ作成の際の課題と活用について明らかにする。具体的には、GISデータベース作成の作業手順と課題、そして、作成したデータをGISを用いて分析した結果について示す。その際、学校現場での郷土教育での利用を意識して考察等を行う。本稿の構成は以下の通りである。IIでは、地域伝承碑のGISデータベース作成の作業手順を説明し、データベース作成上の課題を示す。続くIIIでは、作成したデータベースをもとに地図を描画し分析した結果を示す。そして、IVでは以上を踏まえて、地域伝承碑のGISデータベース作成の意義と、活用における課題について示す。

### II. GISデータベース作成作業手順と作成上の課題

本章では、GISデータベース作成作業の手順について示し、その作成上の課題について言及する。まず、大まかな作業手順を以下に示す。

1) Googleマップで「石碑」、「記念碑」を検索ワードとして検索し、それらの位置情報を取得しMicrosoft Excel(以下、Excelとする)に入力した。2) Googleマップでの位置情報を踏まえて、地理院地図の位置情報、高度などの情報を取得しExcelに入力した。3) Googleストリートビューを確認し、Googleマップに記載のない地域伝承碑の存在について確認を行った。地域伝承碑と思われるものは、Googleマップ、地理院地図で位置情報を取得しExcelに入力した。4) その後、現地に出向き1)から3)の作業で得た情報をもとに地域伝承碑の実在状況を確認し、記載内容などについてメモや写真撮影などにより記録をとった。現地で新たに地域伝承碑を発見した際は、Googleマップにて位置情報を確認するとともに、撮影の際にスマートフォンのGPS機能を用いて位置情報を取得した。現地調査は2021年9月から2023年3月にかけて

行った。なお、現地調査の際、庚申塔や、撤去されたもの、実在を確認できなかったものは Excel から削除した。5) 現地で収集した情報を GIS 用に整理した。

記録等に関しては、国土地理院が示す「自然災害伝承碑に係る調査業務実施の手引き」(平成 31 年 3 月)と「同第 3 版」(令和 3 年 10 月)<sup>3)</sup>(国土地理院)(以下、「自然災害伝承碑に係る調査業務実施の手引き 第 3 版」を『手引き』とする)を踏まえた。

記録内容について、『手引き』(pp.7-9)では、ID、碑名、建立年、所在地、管理担当連絡先<非公表>、災害名(発生日月)、災害の種類、碑文内容、確認者、緯度・経度、確認日、確認方法、備考、を記録することとされている。

本稿では、それを参考にして、ID<sup>4)</sup>、碑名、建立年(年代)、出来事の発生日(年代)、所在地、出来事と地域伝承碑の位置関係、地域伝承碑の種類、碑文内容、説明の状況、地理院地図の緯度・経度・標高・UTM ポイント、Google マップの緯度・経度、説明等の状況、設置場所、確認日、情報更新日、備考、を記録した。出来事と地域伝承碑との位置関係、説明の状況を入れたのは、地域学習などでの活用を想定したからである。また、設置場所、情報更新日を入れたのは、都市開発などで地域伝承碑が移設され地域の文脈から切り離される可能性があることを考慮したからである。なお、Google マップの緯度・経度を記録したのは、Google マイマップの活用を考えてのことである。Google マイマップは、作成したデータを公開し、フィールドワークなどに活用することを想定している。また、上記の地域伝承碑の確認作業において Google マップを活用していることも、Google マップの緯度・経度を記録した理由の 1 つである。

次に、記録をまとめるために用いた主なソフトウェアや、道具は以下の通りである。

1) QGIS。フリーの GIS ソフトウェアである。地域伝承碑の位置情報を地図として描画するために用いる。地図の重ね合わせも可能であり、地域の変容(地域開発)との関わりなども分析しやすいからである。本稿においては、QGIS3.28 を用いた。

2) デジタルカメラ。碑文そのものの状態や碑文の内容を記録するためである。位置情報の確認のための GPS 機能付きや、碑文の判読のためには逆光など光の調整ができると良い。ただし、学校現場などで使うには予算などもあり難しい可能性があるため、今回は、コンパクトデジカメを用いた。今後、GIGA スクール構想における「1 人 1 台端末環境の実現」の推進のため(文部科学省初等中等教育局 学びの先端技術活用推進室)、自治体がタブレット端末の貸与などを進めていることを加味し、タブレットなどの活用も考慮する必要がある。多くのタブレット端末<sup>5)</sup>にはカメラと GPS が内蔵されており持ち運びが容易であることに加え、アーカイブ作成の際に写真データの移し替えの手間などを省くことができる。フィールドワーク時に Wi-Fi はなくても、ハードウェア上に保存しておき、教室に戻ってからクラウドに写真データをアップ

ロードし、グループで情報を共有して作業を進めることも可能である。ただし、フィールドワークの際にタブレット端末が落下し破損しないように気を付けるなど、取り扱いの難しさはある。

地域伝承碑の内容の確認方法、緯度経度情報の取得については、『手引き』(pp.9-10)によると、

「①当該伝承碑の位置を国土地理院のウェブ地図『地理院地図』で計測し、緯度・経度の単位は 10 進『度』として、小数点以下 6 位までを記入します。

②GNSS 測量機やトータルステーション等による現地実測値があれば、その値を記入します。」

とある。国土地理院は上記の①を推奨しており、また、学校現場で教材化する際は②は困難であると考えられるので、ここでも①を採用した。また、地図だけではなく、航空写真も参考にした。なお、ズームレベルは 17 とした。『手引き』(p.11)によるとズームレベルは 17 もしくは 18 とすることとされており、旧下関市のすべての範囲のズームレベルが最高で 17 だったからである。また、『手引き』(p.12)では「スマートフォンや GPS 機能つきデジタルカメラの利用による簡易的な現地計測についても②に替えることはできない」としている。ただし、郷土教育の一環でこういった作業を行うのであれば、すべての生徒が地図の読図に精通しているわけではないので、後に地図上で位置情報を確認するための参考として計測しておいた方がよいと考える。

碑文内容については、『手引き』に、「碑文が漢文や草書体で記述されている場合に解説(現代語訳)した専門家、もしくは、現代語訳を掲げている解説板が設置されている場合、その解説文の設置者、文献の出典等を記載してください。郷土史や広報誌からの引用の場合も、出典を記載してください。または、申請調査の記載内容についての確認を行った担当部署等を記載してください。」(p.8)とある。本稿では、碑文の内容が判読できない場合は、判読できない理由を記録したが、中学校社会科、高等学校地理歴史科の学習指導要領を踏まえると(文部科学省, 2018; 2019)、時間を確保して他の資料にあたることや、博物館や資料館などの協力を仰ぐことも重要であろう。

また、碑文内容などをもとに地域伝承碑を以下の通り分類した。参考にした今井ほか(2017)のうち「人物」、「宗教」、「戦争」、「公共」、「その他」に、下関市の状況を踏まえて「自然」、「交通」、「経済」、「天皇」を加えた。なお、自然は、地形や災害に関するもの、天皇は、御製や行幸記念など天皇・皇族に関するもの、交通は、道路や鉄道に関するもの、経済は、企業に関するものを示す。また、今井ほか(2017)の指摘<sup>6)</sup>を参考にして、地域伝承碑とその地域伝承碑が示す出来事の関係性を「発生地」と「発生地外」に分類した。

データベース作成作業を通して示された課題を以下に挙げる。まず、公園や緑地、山中など敷地が広く目印となる建物が少ない場所において、地理院地図を用いた位置特定作業が難しいことがあった。また、空中写真を参考に位置を特定

する場合においても、公園など緑地が多い場所では樹木で石碑の場所が見えない場合があった。これらについては、スマートフォンで位置情報付きの写真を撮影し、位置情報を把握した。しかし、GPSの測位精度により異なる場所の座標が示されるケースがみられた。

次に、地域伝承碑の写真が撮りにくいことが挙げられる。建物や道路の位置などにより背面に回り込めず撮影ができなかった。学校や企業敷地内のもは立ち入りができず撮影ができなかった。例えば、彦島に「アンモニア合成発祥の地」に関する石碑（木村ほか、2016）（鈴木商店記念館）があるが、企業内敷地であるため今回は立ち入ることができず、確認することができなかった。

また、場所によっては道路幅が狭く、自動車交通など安全に配慮して行う必要がある。画像をデータベースに入れる場合は、背景に映り込むものへの配慮が必要となる。なお、この点については『手引き』（p.12）に通行人・車両・ゴミ・不要な影の映り込み等に十分注意するように指示がある。プライバシーなどの面からも地域との連携が必要であろう。

### Ⅲ. 旧下関市における地域伝承碑の特徴と分布

Ⅱ章の作業を通して総数464基の地域伝承碑を確認できた<sup>7)</sup>。以下、これらの情報を整理、分析し、アーカイブの有用性や課題について検討する。

分類ごとの数は（第1表）、人物92基が多く、以下、交通38基、戦争37基、宗教34基、天皇31基と続く。なお、その他の163基は、歌碑が多かった。一方で、自然は5基、経済は3基と少なかった。地域経済の発展に寄与した人物もおり、分類については今後の見直しも必要である。最も数が多かった人物に関しては、高杉晋作や伊藤博文など歴史の教科書で扱われる者はもちろんのこと、下関の発明家で丸ポスの考案者である俵谷高七、アルコール漬けウニ製造の元祖の城戸久七、下関で日本初のトロール漁業を操業し日本の漁業の近代化に大きな功績を残した國司浩助、関門国道建設事務所初代所長で関門国道トンネルの建設を決断した加藤伴平などといった地域の発展に尽力した人物の地域伝承碑も多い。また、人物以外でも「床屋発祥之地」など身近なものの歴史が分かるものもあった（第1図）。地域伝承碑のアーカイブ化の作業により、教科書には載らないが地域にとって重要な歴史を学ぶことができるといえる。

地域伝承碑の建立年代と出来事の発生年代の関係についてみる（第2表）。建立年代が判明した311基のうち、多い順に昭和140基、平成90基、大正37基、明治31基、江戸13基であった<sup>8)</sup>。比較的新しい年代のものが多いが、江戸時代に建立されたものもあり、今回確認できたなかで最も古いものは、1806年（文化3年）のものであった。

地域伝承碑が取り扱っている出来事の発生年代をみると（第2表）、多い順に江戸86基、昭和75基、明治38基と

第1表 地域伝承碑の分類ごとの数

分類	個数（基）
人物	92
交通	38
戦争	37
宗教	34
天皇	31
公共	27
自然	5
経済	3
その他	163
不明	34
総計	464

（現地調査により筆者作成）



第1図 床屋発祥之地の碑  
（2021年10月17日撮影）

なる<sup>9)</sup>。江戸時代のものとしては「高杉晋作奇兵隊結成の地」、「白石正一郎旧邸跡」、「伊藤博文公夫妻史蹟 梅子夫人の実家跡」など江戸時代末期の明治維新関連のものも多く、地域性が強く現れているものと考えられる。

古いものとしては古墳時代の出来事を扱ったものが3基あり、すべて長府地区で、仲哀天皇に関するものである。仲哀天皇は、熊襲平定のため長府地区に穴門豊浦宮を建て7年間滞在したとされる（忌宮神社）。また、弥生時代の出来事を扱ったものが2基あり、1つは弥生時代の遺跡である新張遺跡（奈良文化財研究所全国遺跡報告総覧）に関するもの、もう1つは1961年に下関市の綾羅木郷遺跡において日本で初めて発見された土笛に関するもの（下関市立考古博物館）、であった。

設置場所は、寺社216基、公共用地100基、道路94基の

第2表 地域伝承碑の建立年代と出来事の発生年代

(単位：基)

	出来事の発生年代													総計
	古墳	弥生	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	明治	大正	昭和	平成	複数	不明	
伝承碑の建立年代							6						7	13
江戸							6						7	13
明治							2	13				3	13	31
大正					1		4	1	15			6	10	37
昭和	2	1		1			20	10	4	51		18	33	140
平成				2	1	1	18	4	2	8	16	18	20	90
不明	1	1	2	4			36	10		16	1	18	64	153
総計	3	2	2	7	2	1	86	38	21	75	17	63	147	464

(註) 出来事の発生年代の「複数」とは、例えば、昭和と平成など複数の年代にまたがっている場合。

(現地調査により筆者作成)

第3表 地域伝承碑の立地場所と出来事との位置関係

(単位：基)

	立地場所と出来事との位置関係			総計
	発生地	発生地外	不明	
伝承碑の立地場所				
専用敷地	9	4	2	15
民間用地	21	3	9	33
公共用地	57	23	20	100
道路	68	7	19	94
寺社	60	64	92	216
その他	4		2	6
総計	219	101	144	464

(現地調査により筆者作成)

順に多かった(第3表)。なお、設置場所のその他は山中や海岸である。また、地域伝承碑の位置と出来事の発生地との関係については、発生地が219基、発生地外が101基、不明が144基であった。多くが地域伝承碑の場所と一致し地域の文脈と合致するが、移設、消滅し地域の文脈から切り離されているものも存在する。例えば清末地区にある「孝女政宅跡」という1934年(昭和9年)に建立された地域伝承碑は、元来は、現在地から南に約630m<sup>10)</sup>の生家跡地にあった。しかし、2021年(令和3年)4月に生家跡地の建設工事のため、関連する地域伝承碑「孝女政碑」(孝行塚)の敷地内に移設された(第2図)。地域伝承碑が移設されず撤去される可能性があること、移設したとしてもその記録が明記されるとは限らないことを考えると、継続的に調査、データベースの更新作業を行い、変化が確認できるようにする必要がある。なお、大平(2020)が明治初期の士族反乱の1つ

である佐賀の乱に関する石碑等の分析から、ナショナルヒストリーとの齟齬や対立を避けるため正の記憶として顕彰するのは難しい場合に「脱現地化」することを示したが、本稿の調査においては、それに該当すると考えられる地域伝承碑は確認できなかった。移設、消滅等の記録を残し、その背景を考察することは今後の課題の1つであると考えられる。



第2図 移設された地域伝承碑

(2021年11月23日撮影)

地域伝承碑の説明の状況については、第4表の通りである。説明板があったものが98基、碑の説明で内容が把握できたものが110基であった。これらは現地で地域伝承碑の由来などが確認できた。一方、碑に説明はあるが内容の把握ができなかったものが65基、説明がなかったものが185基、不明(確認不可)が6基であった。なお、地域伝承碑の説明が不明(確認不可)である理由は、私有地等で立ち入ることができず碑の詳細が確認できなかったからである。このう



ち、碑に説明はあるが内容の把握ができなかった65基の理由についてみると、漢文等26基、説明不足20基、不鮮明14基、その他5基であった。その他は、説明が書いてあるのは確認できるが、碑の位置により角度の問題から判読が難しい、写真が撮れないなどが該当する。これらについては、

第4表 地域伝承碑の説明状況

説明の状況	個数(基)
説明板あり	98
碑に説明があり内容の把握が可能	110
碑に説明はあるが内容の把握が困難(漢文等)	26
碑に説明はあるが内容の把握が困難(説明不足)	20
碑に説明はあるが内容の把握が困難(不鮮明)	14
碑に説明はあるが内容の把握が困難(その他)	5
説明なし	185
不明(確認不可)	6
総計	464

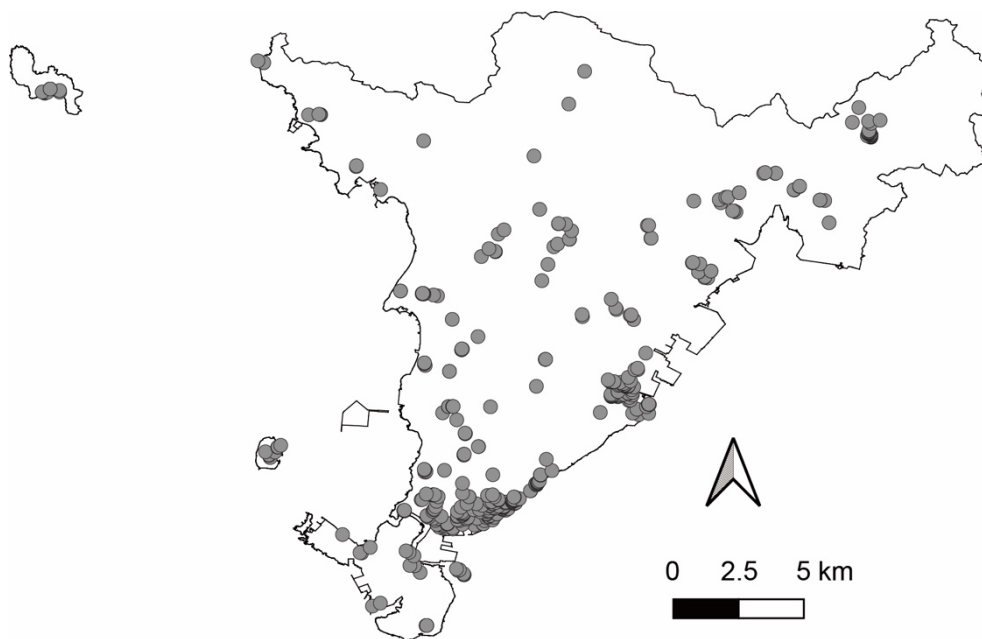
(現地調査により筆者作成)

他の資料での確認作業や補助人材等の確保が必要となる。

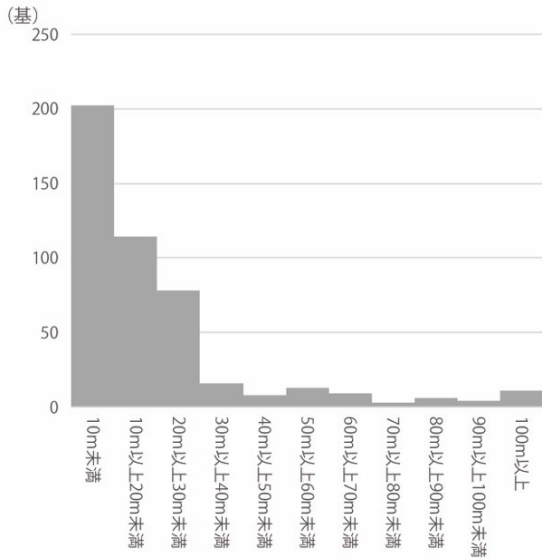
以下、確認できた464基の地域伝承碑についてGISを用いて描画し、分析する。なお、GISの地図データ(領域データ)はe-statで国勢調査から旧下関市の領域を抜き出して用いた。その際、地理院地図で得られる緯度経度情報は世界測地系(JGD2011)であるため(国土地理院)、e-statの境界データも同じ世界測地系(JGD2011)を用いた。

地域伝承碑の分布は第3図の通りである。傾向をみると旧下関市の中でも南部、下関駅から唐戸にかけてと、長府城下町に多い。また、それ以外の場所は、幹線道路、旧街道沿いに多い傾向がみられる。地域の歴史、人口(集落)分布が影響していると考えられる。

第4図は、地域伝承碑の位置の標高のヒストグラムである。標高10m未満が202基で全体の45.3%、10m以上20m未満114基、20m以上30m未満が78基で続く。市域の南部に地域伝承碑が多いことが影響しているといえる。なお、標高100m以上は11基のみである。



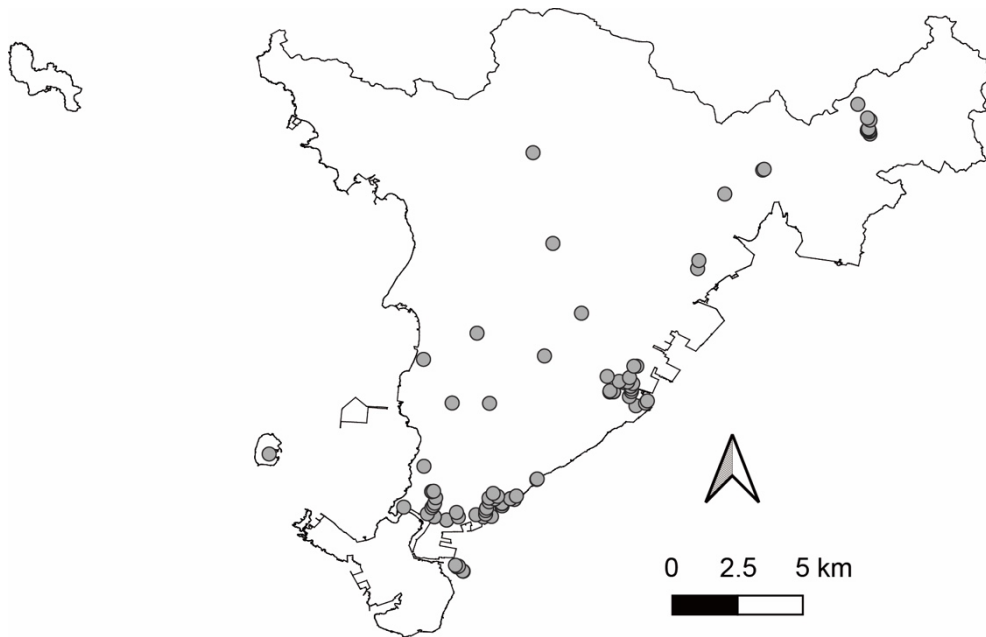
第3図 旧下関市における地域伝承碑の分布  
(現地調査により筆者作成)



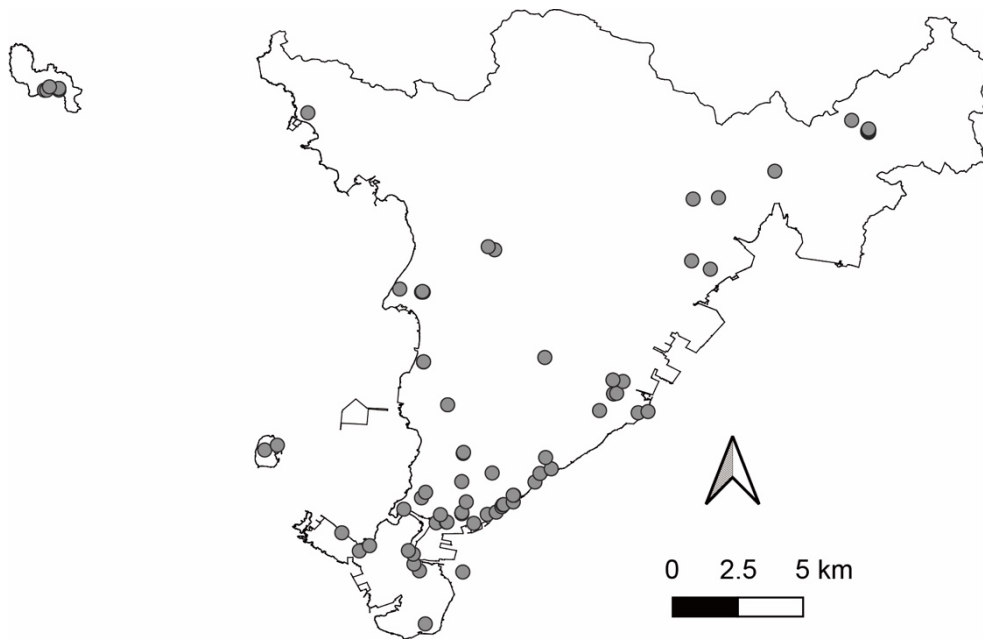
第4図 地域伝承碑の位置の標高  
(地理院地図を用いて計測し、筆者作成)

先述した通り江戸時代の出来事を取り上げる地域伝承碑が多かったため、第5図にその分布を示した。全体の傾向と同様に唐戸や長府に多い。また、範囲の北東に位置する清末、小月、吉田などにもいくつか分布しているが、清末には萩藩の孫藩である清末藩の陣屋、吉田には奇兵隊の陣屋があった。また、これら3地区は下関から萩へと至る赤間関街道（中道筋）沿いである。次に多かった昭和の出来事を取り上げた地域伝承碑の分布をみると、唐戸と長府に多いことは変わらないが、彦島や蓋井島などにも分布し、範囲が広がる（第6図）。

以下、分類ごとの分布をみる。人物については、下関駅周辺と唐戸周辺、長府が多いが内陸部にも分布する（第7図）。下関駅周辺と唐戸周辺、長府のものは明治維新に関する人物や、そのほか金子みすゞや、林芙美子など著名人が多く、内陸のものは旧村の村長など集落の発展に寄与した人物が取り上げられていることが多い。交通は、国道9号線（国道2号線）と国道191号線、かつての赤間関街道の中道筋と北浦道筋沿いに線上に並ぶ傾向が見られ、特に街道の起終点



第5図 江戸時代の出来事を取り上げた地域伝承碑の分布  
(現地調査により筆者作成)

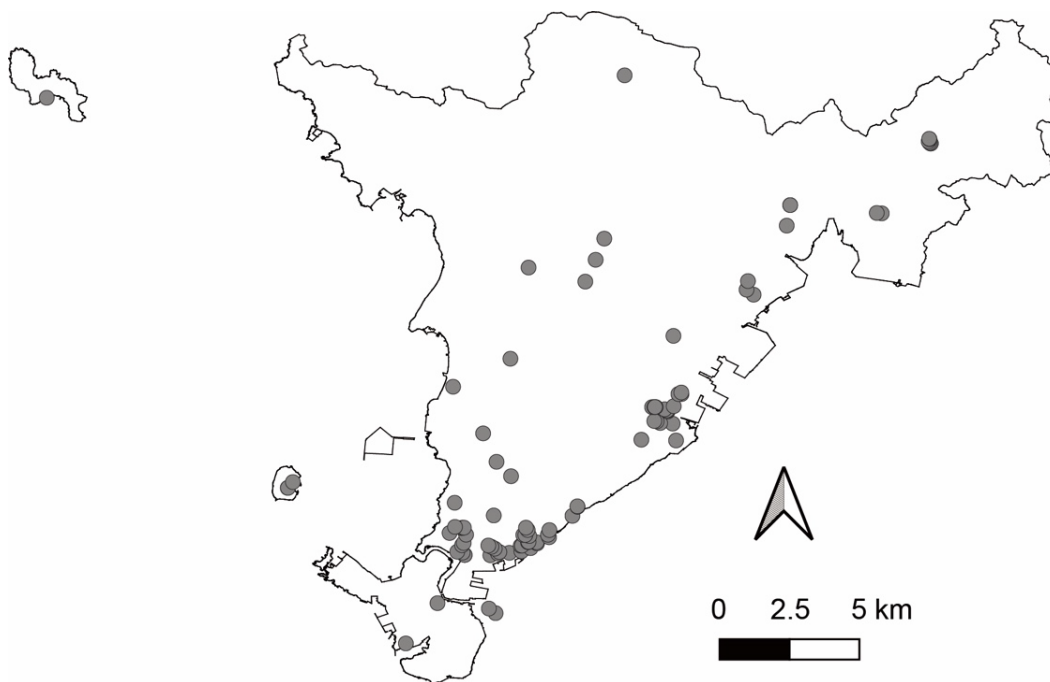


第6図 昭和の出来事を取り上げた地域伝承碑の分布  
(現地調査により筆者作成)

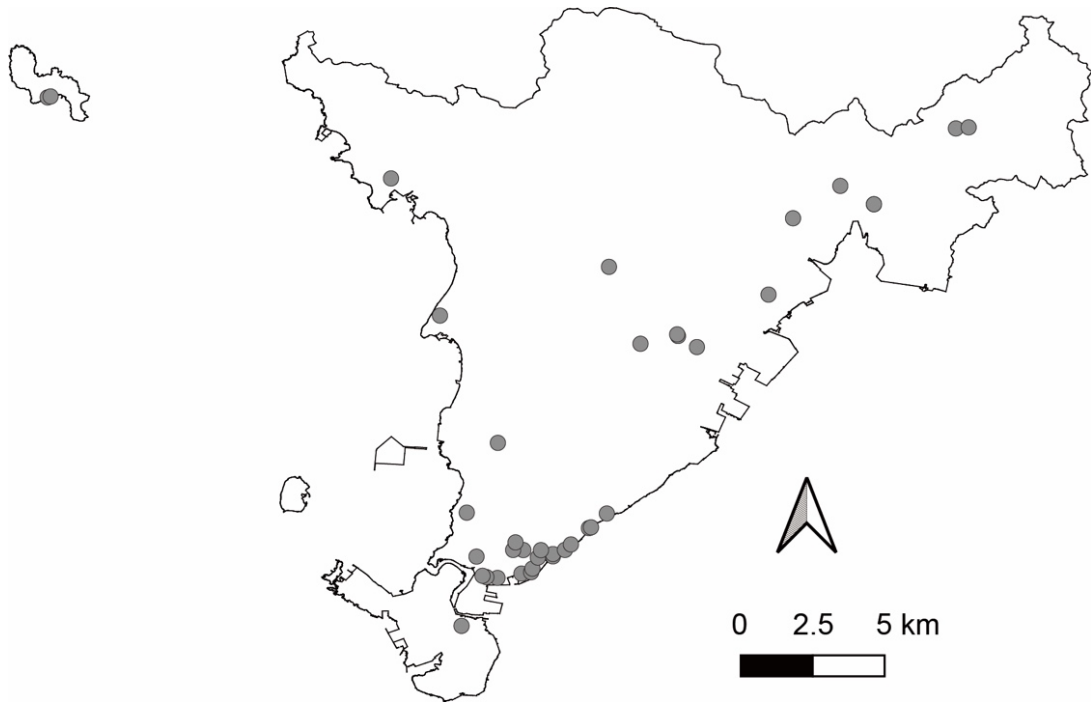
であり港がある唐戸周辺に多い(第8図)。戦争は、唐戸から壇ノ浦、六連島など海岸沿いへの分布が特徴の1つとしてみられ、これらの多くが砲台の跡地などに関するものである(第9図)。また、内陸にもみられるが、日清・日露戦争の戦勝に関するものと地区出身者の慰霊碑が多い。

地域伝承碑の説明の有無について、説明があり内容が容易に把握できるもの<sup>1)</sup>と、説明なしのものの分布を第10図と

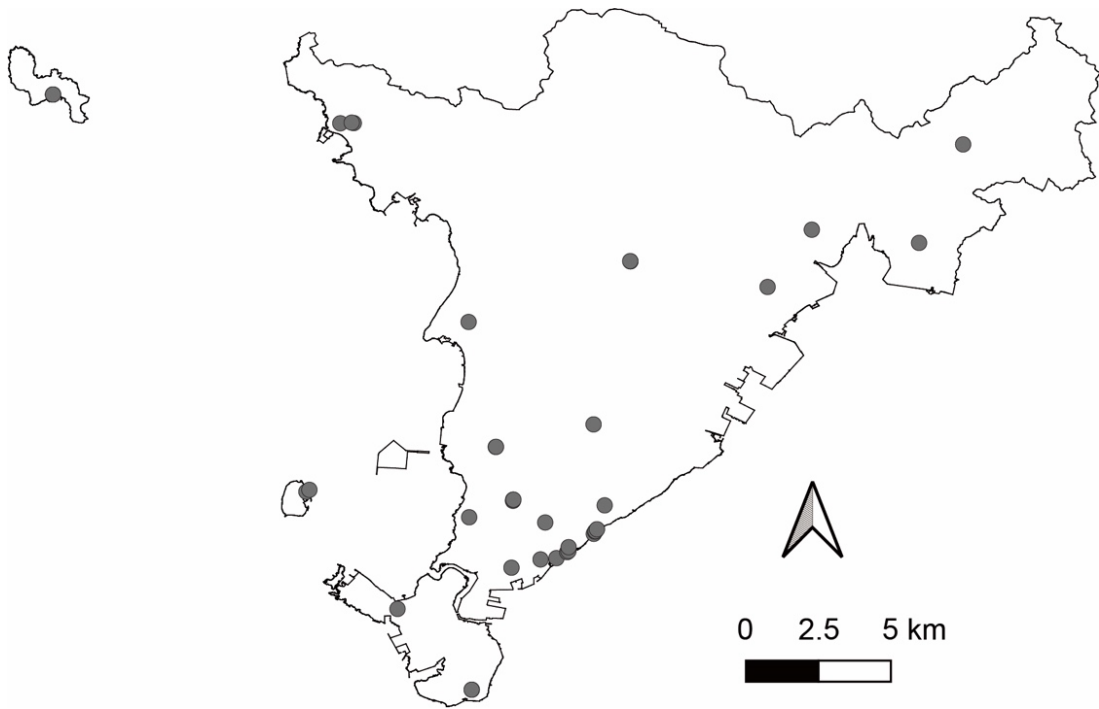
第11図に示した。分布には大きな差は見られず、説明がない地域伝承碑は下関市の主要な観光地である唐戸や長府にも多い。観光客に地域について学ぶ機会を提供するためにも、説明板などの整備が必要だと考える。さらには、先述した、碑に説明があるが内容の把握が困難(説明不足)と、碑に説明はあるが内容の把握が困難(不鮮明)、であるものも含めて、記録を残すという点でも早急な対策が必要であろう。



第7図 人物を取り上げた地域伝承碑の分布  
(現地調査により作成)

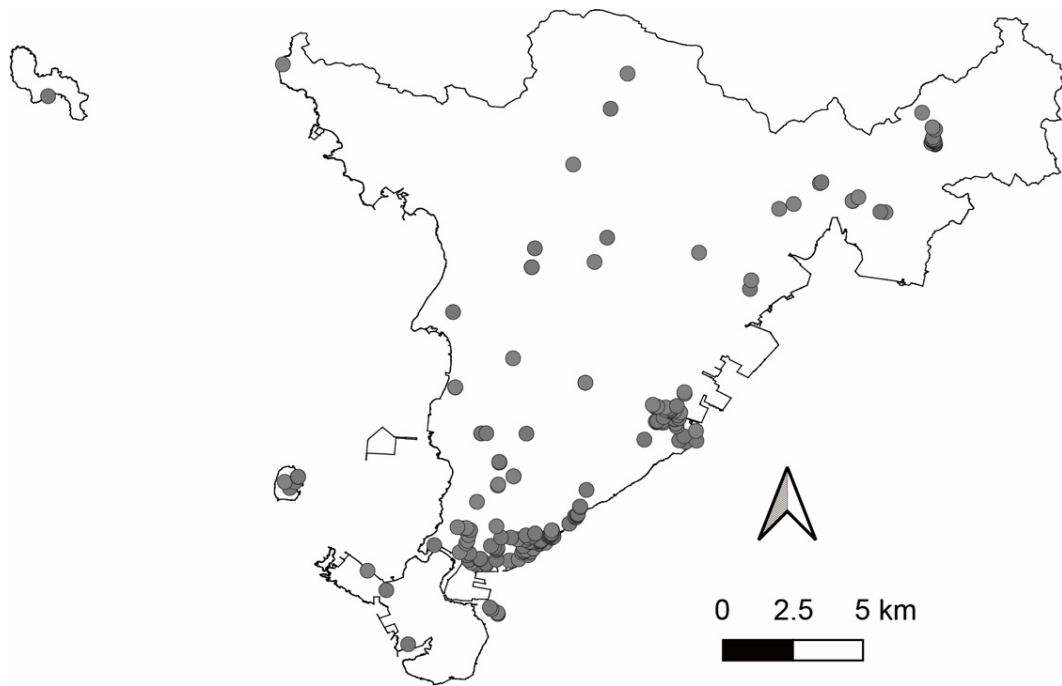


第8図 交通を取り上げた地域伝承碑の分布  
(現地調査により筆者作成)

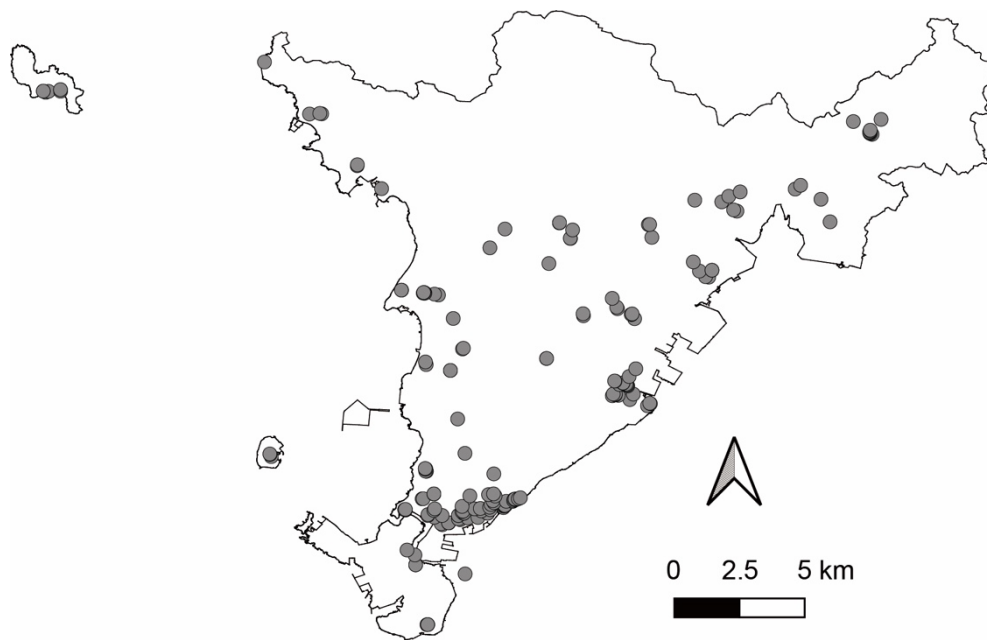


第9図 戦争を取り上げた地域伝承碑の分布  
(現地調査により筆者作成)





第10図 説明があり内容が容易に理解できる地域伝承碑の分布  
(現地調査により筆者作成)



第11図 説明なしの地域伝承碑の分布  
(現地調査により筆者作成)

#### IV. おわりに

本稿では、GIS データベース作成し、作成上の課題と作成したデータベースを用いた分析結果を示した。そして、地域伝承碑そのものの意義や、地域伝承碑やその GIS データベースを郷土教育などに活用する上での課題について分析してきた。

データベース作成作業に関して以下の課題が明らかとなった。まず、地理院地図を用いた位置特定作業が難しい場合があった。例えば、公園や緑地、山中など敷地が広く目印となる建物が少ない場合である。また、空中写真を参照して位置を特定する場合においても、樹木で地域伝承碑の場所が見えない場合がある。これらについては、スマートフォンで位置情報付きの写真を撮影し、位置情報を把握するなどの対応が必要となる。しかし、GPS の測位精度の問題は考慮しなければならない。

次に、地域伝承碑の写真が撮りにくい場合があった。建物や道路の位置などにより地域伝承碑の背面に回り込めず撮影ができない、学校や企業敷地内で立ち入りができないなどがその理由である。立ち入りができない場合については、地域のさまざまな主体に協力を求めることが必要である。また、地域のさまざまな主体との連携については、地域伝承碑の内容が漢文などで内容が理解できない場合があることや、写真撮影の際に背景に写り込むものへの配慮という点でも必要となろう。

作成したデータベースを分析し、以下の点が明らかとなった。旧下関市における地域伝承碑の分布は、唐戸や長府などに多いことが示された。これらの地区は、旧山陽道の起終点など交通結節点、城下町であり、古くから下関市の中心地として栄えた地区である。地域の歴史、人口分布が影響していると考えられる。

地域伝承碑の分類については、人物に関するものが最も多かったが、次に交通が続き、港町として栄えた下関の特性が現れていると考えられる。また、分類ごとに場所の違いもみられ、例えば交通は唐戸の周辺と国道 9 号線（国道 2 号線）、国道 191 号線、旧赤間関街道沿いに多くみられた。

地域伝承碑が取り上げている出来事の年代は、江戸時代の末期、明治維新関連のものが多かった。地域を代表する歴史が現れているといえる。

地域伝承碑の建立場所と取り上げられている出来事の関係性をみると、多くが地域伝承碑の場所と一致するが、移設、消滅したりするなどして地域の文脈から切り離されたものも存在する。必ずしも移設されるとは限らず、移設の記録が明記されるわけではないので、データベースを更新し、経年変化が把握できるようにしておく必要がある。矢野（2021）が指摘するように継続的なデータベースの更新が重要であり、一元管理できる形、GIS でアーカイブ化することの強みが活けると考える。

地域伝承碑の調査を通して、明治維新のような地域を代表

するような歴史はもちろん、地域固有、集落単位の歴史も学ぶことができることが明らかとなった。一方で、地域伝承碑の説明が十分でないことも示された。学校現場において郷土教育での使用を考えると、これらの整備が求められる。

地域伝承碑のアーカイブ作成とその分析を通して、これらは、郷土教育や地域の地理の学習において有益であることは確認できた。地理の学習という面では、位置特定作業で地理院地図の読図が必要となるため、事前指導などが課題となる。タブレット端末を用いて GPS を補助的に活用すること、QField や Mergin Maps Input Apps を用いて QGIS と同期させたり<sup>12)</sup>、カメラ付きメモ機能を活用したりすることも考えられるが、これも先述した通り場所によっては測位精度の問題もあり、事前に確認する必要がある。また、藤本ほか(2016)が指摘する通り、統一的に整理された石碑の情報がインターネット上で検索でき、地域社会や学校現場などの防災教育あるいは郷土教育の資料として活用されることにつなげるためには、先述した QField や Mergin Maps Input Apps のようなアプリや WebGIS の活用も検討する必要がある。例えば、Google マイマップや Re:Earth<sup>13)</sup> の活用が考えられる。このようなデータベースの公開については今後の課題である。

#### 【註】

- 1) 人物の顕彰碑や災害、開発の出来事など地域の歴史を伝える石碑や石像、銅像などを、本稿では「地域伝承碑」と呼ぶことにする。
- 2) 2005 年 2 月の合併前の市域を指す。なお、旧下関市に限定したのは、市域が広く現地調査の限界を考慮したからである。
- 3) 2023 年 10 月 1 日時点では、2023 年 3 月に公表された「第 5 版」が用いられている。ただし本稿では、地域伝承碑のアーカイブ化作業開始時点の「第 3 版」を用いる。
- 4) なお ID は、伝承碑の位置情報をもとに南西から割り当てた。
- 5) QField や Mergin Maps Input Apps など、サードパーティが提供し QGIS と連携できるスマホ・タブレット用のアプリがある。これらは、以下の QGIS のダウンロードページから取得できる。  
<https://qgis.org/ja/site/forusers/download.html>（2023 年 10 月 1 日閲覧）
- 6) 今井ほか（2017）は石碑の特質を以下の 3 点に整理している。1) 当時の地域の人々にとって重要な事柄が石碑として顕彰される。2) 石碑の建立によってその場所が意味づけられ、地域のアイデンティティのシンボル・拠り所として保護される。3) 石碑が位置する場所そのものに意味がある場合がある。また、石碑の属性を「人物」、「宗教」、「戦争」、「農業」、「公共」、「その他」に分類している。そして、「教材としての内容、情報量とも十分なもの」、「内容は十分であるが、情報量が不十分なもの」、など、その後の活用を踏ま

えた分類も行っている。

- 7) なお、確認できたものだけで、実際には見落としているものが存在することも考えられる。
- 8) なお、昭和と平成など複数の年代にまたがるものは複数としている。
- 9) 不明は147件であった。また、人物について、例えば、明治から昭和まで存命した人は、明治・大正・昭和、という形で記録している。
- 10) この数値は、2点を結ぶ直線距離を計測したものである。
- 11) 第4表の、説明板ありと、碑に説明があり内容の把握が可能、の合計である。
- 12) 同期するにはクラウドサービスへのユーザー登録が必要となる。
- 13) ソフトウェアのインストールなしに利用できるWebGISである。「最新Web技術による『デジタルツイン』構築プラットフォーム『Re:Earth』をオープンソースソフトウェアとして開発」、東京大学大学院情報学環・学際情報学府ウェブサイト、<https://www.iii.u-tokyo.ac.jp/news/2021072615178> (2023年10月1日閲覧) より。

#### 【参考資料】

- ・木村健二・佐藤裕哉・水谷利亮 (2016) 『関門地域の工業化と鈴木商店-歴史遺産マップ-』下関市立大学地域共創センター。
- ・文部科学省 (2018) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 社会編』東洋館出版社。
- ・文部科学省 (2019) 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 地理歴史編』東洋館出版社。
- ・今井貴秀・横川知司・氏原 秀・竹下紘平・陶 子・潘意涵・江頭千尋・鎌田祥子・鎌田祐介・中村勇介・復本真利江・藤本理志・橋本訓典・村田 翔・弘胤 佑・熊原康博 (2017) 「広島県東広島市旧西条町内に分布する石碑の特徴と社会科教材としての意義」『広島大学総合博物館研究報告』9号, pp.1-15.
- ・植村善博 (2018) 「室戸台風による京都市とその周辺の学校被害と記念碑」『京都歴史災害研究』19号, pp.13-24.
- ・大平晃久 (2020) 「佐賀の乱における記念・顕彰の景観化」『浦上地理』6号, pp.8-16.
- ・藤本理志・小山耕平・熊原康博 (2016) 「広島県内における水害碑の碑文資料」『広島大学総合博物館研究報告』8号, pp.91-113.
- ・矢野桂司 (2021) 「2010年代末における京都市の宿泊施設GISデータベースの構築とその活用」『立命館文學』672号, pp.890-872.
- ・李 明・石丸紀興・岡河 貢 (2004) 「歴史的建物の建築寿命とその存続形態に関する考察-広島における被爆建物の実態とその動向に着目して-」『日本建築学会計画系論文集』584号, pp.107-113.
- ・忌宮神社「神社概要」、忌宮神社ウェブサイト、<https://iminomiya-jinja.com/about> (2023年9月19日閲覧)。
- ・国土地理院「自然災害伝承碑に係る調査業務実施の手引き」、国土地理院ウェブサイト、<https://www.gsi.go.jp/common/000235746.pdf> (2021年11月1日閲覧)。
- ・国土地理院「地理院地図 | 地理院地図で得られる値等について」、国土地理院ウェブサイト、<https://maps.gsi.go.jp/help/howtouse.html> (2023年9月1日閲覧)。
- ・下関市立考古博物館「土笛作り | 教育普及」、下関市立考古博物館ウェブサイト、<https://www.shimo-kouko.jp/education/active-learning/tsutibue/> (2023年9月19日閲覧)。
- ・鈴木商店記念館「クロード式窒素工業の歴史⑦」、鈴木商店記念館ウェブサイト、<http://www.suzukishoten-museum.com/footstep/company/cat10/post-71.php> (2023年10月1日閲覧)。
- ・奈良文化財研究所全国遺跡報告総覧「新張遺跡-全国遺跡報告総覧」、奈良文化財研究所ウェブサイト、<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/29595> (2023年9月19日閲覧)。
- ・文部科学省初等中等教育局 学びの先端技術活用推進室「GIGAスクール構想による1人1台端末環境の実現について」、文部科学省ウェブサイト、[https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt\\_chousa02-000007680-6.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_chousa02-000007680-6.pdf) (2023年8月29日閲覧)。